慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ 『路上の国柄』 書評論文リプライ
Sub Title	
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2007
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.12 (2007.) ,p.122- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20070000-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

『路上の国柄』書評論文リプライ

藤田　弘夫

I

本書が学術誌に取り上げられたのは、本誌が最初である。これから出てくるのか、それとも、これで終わりなのか、それを、今、見守っている。本書の刊行には予期せぬことが続いた。本書は刊行後、さまざまなマス・メディアに取り上げられ、当初に予想していたよりはるかにさまざまな分野で反響があった。著者としては望外の喜びであった。しかしそれにもかかわらず、肝心の本がこれほど売れないのも、誤算というべきか予想外であった。取らぬ狸の皮算用とはこのようなことを言うのだと自嘲している。

吉野英樹氏には本書を丁寧に読んでいただいて恐縮している。研究者が本格的に書評をするに値する本かどうか迷いもある。吉野氏も本書の書評を依頼されて、さぞ戸惑ったことと想像している。私としても、本書の内容をどのような形で刊行するか迷っていた。私は前々からこの種のものを書きたいと思っていたが、刊行するにいたらなかった。それを刊行へと決断させたのは、デジカメによる表現力の獲得である。写真は多くの情報をもっている。これまで美しい写真、面白い写真は語られてきた。しかし本書が目的するのは、何といっても、写真を通じて「考える」ことである。これによって、文章ではなかなか理解してもらえない現実を描き出したかった。

私の意図は、誰もが普段見ている路上の風景に、最近人文社会科学のひとつの焦点となっている＜公共性の問題＞を読み込もうとすることである。吉野氏の指摘するように「考現学」につながるものである。最近の藤森照信氏の「路上観察学」よりは、今和次郎の「考現学」の方に近いと考えている。カラー写真の入った本の刊行を目指したが、定価との関係で果たせなかった。しかしカラー写真は表現力が強すぎて、文章が写真に埋没する可能性があるので、白黒の方がよかったのかもしれない。

II

公私関係や公共の問題は質問に答えるというより、対話や議論を通じて問題を煮詰めていくことに、大きな役割が考えられる。吉野氏から提出された質問は、ぜひ氏と議論してみたい問題である。でも、それでは、書評のリプライの意味がなくなるので、課題として最小限触れるにとどめたい。まず、第一の有賀喜左衛門の「公私問題」については、いつか本格的に取り組みたいと考えている。しかし不思議なもので、ご本人から農村社会学を学んだこともあってか、かえって有賀先生の公私問題をうまく対象化できないでいる。現在は近世の概念に言及する余

裕がなく、もっぱら明治に復活した官制との関係で、公を考えることにしている。しかし三田社会学会の会員なので、福澤諭吉の「立国は私なり、公に非ざるなり」の一節を考えて見なければと思っている。

第二の国の意味については、現在多くの写真資料の収集をしているところである。現在、この問題を、とくに外国との比較で研究を進めている。外国のものは文字の関係で漢字文化圏かローマ字文化圏に限られているが、吉野氏の関心を引いたパブリック、プライベイトをひとつ焦点としている。タイの国王の肖像の問題に関しては、偶像崇拝とも関連して、ぜひ議論したい問題だがここでは筆を置かざるを得ない。ひとことだけ触れておくと、天皇の肖像というと、明治天皇の教科書に掲載されている元帥服姿の像を想起させるが、これは例外的なもののようである。私としてはむしろ奉安殿に掲載されていた写真やそれとの関係で二宮尊徳像に興味をそそられている。先日、台湾の高雄で新品の二宮尊徳像がデパートで 50 万円ほどで売られていたのには驚かされた。

次の公共の看板や文言に県民性や県庁（職員）の違いによってあるのかとの問についてだが、これには県民性はともかく、県庁による違いがあまりにもないことの方に興味を覚えている。むしろ地方に行くほど、中央志向の看板が目立つようである。官尊民卑は地方ほど激しいようである。それは身分制的なものではなく、階級的なものでもある。公務員と民間人の給与差は地方ほど激しい。この点、参考になる看板があるようならば、ぜひ、ご教示いただきたい。

Ⅲ

公私関係や公共の問題の研究のテーマに枚挙の暇はない。新学期、早々、テレビを見ていると、某公立大学の学長が教員の処分を発表していた。同じ業界に身を置くものとして、事柄の性質上、発表に注目していた。どうも教員の行き過ぎた指導が学生の自殺を誘発したというものであった。ここまでは上の空だったのだが、次に続いて聞いた処分理由が気になった。

「処分の理由といたしまして、教育的配慮を欠いた留年勧告が直接の誘引となったもので、かつその後の対応は不適切でありました。さらに演習指導上において、数々の全体の奉仕者としてふさわしくない行為があり、公務員の信用を失墜させたことによるものです。」

この大学は処分の理由として、公務員の信用を失墜させたことを理由のひとつにあげている。この教員が民間人ではなく、公務員であることの自覚を強く意識しているようである。この大学については、前から気になっていた点がある。というのも、以前、図書館でこの大学の紀要に掲載されていた論文を探していたときに、公立大学なのに教員の退官論文集が出ていて驚いたことがある。

今ではあまり気にしない人が多いが、公立の大学は民立の大学であって、官立の大学ではない。しかし公はしばしば官に準じて扱われる。そこで、官公署ということばがあるくらいである。したがって、公立大学が退官論文集を刊行しているのを見た時、官名詐称に該当しないのかと心配したぐらいである。ただ、言えることは、この大学は公務員に高い倫理性を要求して

いることである。それは結構なことである。問題はこの処分理由に、民間では、要求されていない倫理性を含めていることである。しかし民間は本当にそうした倫理性を要求されていないのだろうか。もし、この教員の行為は公務員でなければ、処分されないだろうといわんばかりである。このことを文章で説明するのは煩雑で難しい概念の説明がともなう。しかしこのことを、パッと明らかかにする文言が、この大学のどこかに存在するように思う。いつか地方にあるこの大学にも足を運びたいと考えている。

（ふじた　ひろお　慶應義塾大学文学部）